

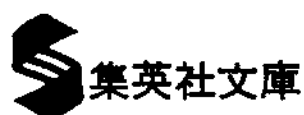
集英社文庫

船乗りクプクプの冒険

北 杜 夫



集英社



集英社文庫

船乗りクラブの冒険

0193-750030-3041

昭和52年6月30日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 北 杜 夫

発行者 堀 内 末 男

発行所 株式会社 集 英 社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101

電話 東京 (230) 6361 (編集)
(230) 6171 (販売)

印刷 中央精版印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します。 (落丁本・乱丁本はおとりかえします)

© M. Kita 1977

Printed in Japan

日本財団支援



集英社版

クブクプとは何者か？

諸君のうちで宿題の好きな人がいるだろうか。日本でもイギリスでもポルトガルでも中国でも、宿題というものはだれもがきらいだ。どんな偉い人でも、科学者でも、市長さんでも、校長先生でも、やっぱり宿題は好きでなかった。

それでも宿題というものはやらなければならない。

それだからタローは宿題をやっていた。どんな宿題かというと、算術、算数、数学とかいわれるもので、できがわるい子どもはみんなこれが苦手なのだ。そして、むろんのことタローはできがよいほうではなかった。

彼はブツブツひとりごとをいていた。

「ええと、十八と五をたすと……二十七と……それを三で割ると……これは八だ。おかしいぞ。妙だぞ。ふしぎだぞ。ヘンチクリンだぞ。こんなふうにスラスラとつけてしまうはずがないわけだがなあ」



彼は二、三度頭をたたいてからつぶやいた。

「この答えがあっているかあっていないかを、ひとつ確かめてみよう。それにはこれを逆にやってみればいい。そのくらいのことはちゃんとして知ってるぞ。ええと、八に三をかけると、これは三十二だ。それから五をひくと……ありやありや、まるっきりへんだぞ」

それからタローは大きくうなずいた。

「つまり、この答えはまちがっている。それがわかっただけ、ぼくにしては大できた。きょうはもうこれで宿題をやるのはやめにしよう。これは実にアツパレな考えだ」

こうしてタローは宿題をやめてしまった。

といって、すぐ外へ遊びにゆくわけにはいかなかった。なぜなら、おかあさんがちゃんと彼の部屋を見はっていたからだ。ぜひとも勉強をしているフリだけでもしなければならぬ。そこでタローは、一冊の本をとりだした。マンガだろうか？ 西部活劇であろうか？ それとも科学冒険小説か？ いやいや、その本の表紙には、こう記ししてあった。

『船乗りクプクプ、キタ・モリオ著』

「クプクプだって？ へんてこな名まえだなあ」

と、タローは思った。

もっともその本はタロー自身が買ったのだった。彼は海が好きである。船が好きである。しかし、二、三度海水浴に行ったことがあるきりだし、ボートより大きい船に乗ったことはなかった。

その代り、彼は、いろんな海の本を、『シンドバッドの冒険』から『海賊物語』というような本をたくさんよんでいる。本屋で目についた『船乗りクプクプ』を中身をひらいてもみずに買ってきたのもそういうわけだったが、なによりその本がベラボーに安かったからだ。

「こんな安い本じゃ、きつとろくなこと書いてないだろうなあ」と、タローは思いながら表紙をひらいた。

すると、最初に「まえがき」があって、それにはこう書いてあった。

わたくし、つまり小説家キタ・モリオは、これから船乗りクプクプの物語をかく。

よみたい人はよむがよからうし、よみたくない人はよまないがよからう。

「なんだかこのキタ・モリオって人は、勝手な人だなあ」と、タローは思った。それから、ペーシをめくって、本文をひらいてみると、そこにはこう書いてあった。

いつの時代か、どこの国かは知らないが、クプクプという少年がいた。

これがつまり船乗りクプクプである。

それがいったいいつの時代であるのか、いったいどこの大陸や海洋の話であるのか、とんとわからぬ。読者はそんなことを知りたがってはいけない。作者のわたしが知らないのだから、

どこのだれにきいたってわかりっこない。

「いよいよ勝手な人だなあ」と、タローは思った。

それから、次のページをめくってみると、そこにはこう書いてあった。

赤ん坊のときから、クプクプは海が好きだった。彼の家は海べにあった。風のない日、眠たげな波のさざめきを、風の吹く日、ただけしい波のとどろきを、子守歌にして彼は育った。

よちよち歩きができるようになるころから、波打ちぎわはクプクプの遊び場だった。いろんな海草がうちあげられ、カニやヤドカリや姿のおもしろい貝がごそごそとうごいていた。そうして砂にまみれ、潮水に足をぬらしたクプクプの前には広い青い海がひろがっていた。どこまでも青くはてしなくひろがる海。そうして潮風がちいさな少年の髪をみだした。

もうすこし大きくなると、クプクプははるかな水平線をながめて、ぼんやりと立っていることが多くなった。なにもかも忘れ、うつとりとしたまなざしで。水平線はわずかに丸かった。ときにはもやのためにかすんでいた。

あのむこうにはなにがあるのだろう。この広い海のはてにはどんな世界があるのだろう。そしてまた、そのまたむこうにも海はやはり広がっているのだろうか。どんな海が？ やっぱりこのように青いのだろうか？

クプクはなににも知らないのであった。自分の遊び場である海べと、自分の家であるちいさな小屋をのぞいては、なんにも。

「なるほどなあ」とタローは思った。

「やっぱり小説家というからには、なかなかうまいところがあるなあ。これならツヅリカタにしてだせば、良の上か、ひょっとすると優をもらえるかもしれないぞ」

しかしまた思った。

「だけど小説家といえは文章をかくのが商売じゃないか。それにしてはあんまりうまくないなあ。きつと三文作家というやつかもしれないぞ」

それからタローは次のページをめくった。そしてビックリした。そこにはなんにも書いてなかったからだ。次のページも、またその次も、ただの一つの活字もないまっ白な紙にすぎなかった。これはいったいどうしたわけなのだ？

タローはいっしょうけんめい本をめくってみた。しかしどのページもどのページもまっ白なのだ。なんにも書いてない。これではノートとかわりがない。なんという本なのだろう。この『船乗りクプク』という本は！

事情をうちあげれば、この本の著者、つまりキタ・モリオ氏がそれしか原稿をかけなかったのである。それ以上書く気がなくなってしまったのだ。

キタ・モリオ氏はとびきりのナマケモノであった。朝はなかなか起きない。寢床が好きなのである。あまりおそ起きをするので、起きてからもボウツとしている。日がくると、電灯をつけるのはもったいないといって、すぐさま寝てしまう。これでは原稿などかけるはずがない。

もうひとつ困ったことに、キタ・モリオ氏にこの本をかくことを命じた編集者が、オツカナイ人なのであった。ひげがはえていて、力も強そうで、おまけに短気者ときているのだ。

「いいですか」と、彼はいった。「あなたはこの本を今月じゅうにかくと約束した。あなたは頭がわるいから念のためにいっておきますが、今月というあと三日ですよ。三日という、あなたは頭がバカだから教えてあげますが、二十四時間の三倍、つまり七十二時間ですよ。七十二時間という、あなたは頭がヘンだから計算してあげますが、これを分でいうと、ええと四六が二十四、六七が四十二、えい、そんなことはどうでもいい、とにかくあと三日たったらわたしはここにやってきて原稿をいただきますからね」

かわいそうなキタ・モリオ氏は努力をした。それはうけあってもいい。彼は朝早くから起きた。しかし目がくらんでなにも書けなかった。彼は夜になっても眠らなかった。マブタがたるんでくると、マッチ棒でつかい棒をした。

そのうちとても眠くなつてマブタはますます重くなり、マッチ棒がパチンと折れると、彼は新しいマッチ棒でつかい棒をこしらえた。彼は百十三本のマッチ棒を使用した、ただ目をひらいているだけで、一字だつてかけはしなかった。

いよいよあと一日と期日が迫ったとき、キタ・モリオ氏は家を売りはらって、別な場所に引越してしまった。あのおそろしい編集者がこわかったからだ。期日になって編集者がやってきてみると、家はモヌケのからだだった。

しかし編集者は交番へ行き、区役所へゆき、キタ・モリオ氏の新しい住居をしらべあげた。彼はカンカンになっていた。キタ・モリオ氏の新しい家はたいへん遠かったので、編集者はまず電話をかけようとした。しかし当の相手の家には電話なんぞついていなかった。編集者は電報をうとうとした。ところが当の相手の家には番地さえついていなかった。

編集者は烈火のごとくおこった。彼はタクシーをやとい、メーターがどんどんあがるのもかわず、けしからん小説家をつかまえようとやってきた。

ところが、彼がやってきてみると、その家はまたしてもからっぽだった。キタ・モリオ氏は編集者のやってくることを第六感で感じとり、カバンにシャツとパンツと歯ブラシ一本と、そのほか目についたガラクタをつめると、どこへともしれず姿を消してしまったのである。ただ、家中に、一枚の紙が残っていて、それには『船乗りクラブ』の「あとがき」だけが書いてあった。こうして、『船乗りクラブ』は大部分白紙の本となってしまうたわけなのだ。

さて、そういう事情を知らないタローは、なんにもかいてない本をあきれてめくっていったが、一番おしまいに「あとがき」というのがのっているのを発見した。それにはこう書かれてあった。

『船乗りクプクプ』はこれでおしまいである。なぜなら、わたしがこれ以上かかないからだ。

したがってこの本は、本文が二ページ、「まえがき」と「あとがき」をいれて、合計四ページしかない。それでは本にならぬので、二百四十四ページの白紙をいれることにした。読者はこれをノート代りに使ってよい。フクちゃんクリちゃんや鉄腕アトムの絵をかいてもよからうし、わたしの代りに、船乗りクプクプの物語を書いてくれれば、一番つごうがよい。

この本はノートとしての価値しかないから、定価ははなはだ安い。したがって印税もタダ同然である。わたしは目下逃走中であるが、このぶんではうえ死にしないともかぎらない。さらば読者よ、ふたたびまみえることは期しがたい。さよなら、バイバイよ。

これを読みおわって、タローは今度こそ本当にあきれてしまった。

「このキタ・モリオって人は、まったくひどいやつだなあ」

タローはフンガイして本をとじた。

と、そのときふしぎなことが起った。

はじめ、タローはメマイのようなものを感じた。頭のうしろがグルグルとまわり、からだグツともちあげられるような気がした。それから気がとおくなり、ただ、自分が空中をおそろしい速さでとんでゆくな、とかすかに感じた。

どのくらいの時間がたったかはわからない。

皮膚がじりじりとあつい。耳に波の音がきこえた。タローは目をひらき、思わず声をあげそうになった。

ここは部屋の中ではない。焼けるようにあつい砂の上に彼は倒れていた。頭の上にはまっさおにポスター・カラーをぬりたくったような空がひろがり、太陽がギラギラと輝いていた。また波の音がした。タローはからだをおこして、すぐ前に波がくだけて白くあわだつのを見た。

ここは海岸なのだ。どこか見知らぬ海岸なのだ。白い砂浜。どこまでもはてしなくひろがる青い海。

「こりゃまたどうしたわけなんだ？」とタローは思った。

「それにしても暑いなあ。こりゃどうも熱帯地方らしいぞ」

タローは立ちあがって、からだについている砂をはらおうとした。すると、どうも身なりがへんなのだ。彼はさっきまでたしかセーターを着て宿題をやっていたはずだった。

ところが、いまは、なんだかうすぎたない白い服をきている。服というよりボロきれをからだにぐるぐる巻いているといったほうがいい。頭に手をやると、これもターバンみたいな布がまいてある。足は——くつ下さえなかった。まったくのハダシなのだ。足の裏があつい砂をふんでやるようだった。

「ははあ、ぼくは夢を見てるんだな」と、タローは思った。

「きつと、あんなヘンな本をよんだから、夢をみてるんだ」

夢というものはほんとうに奇妙なものだ。いったいどうして夢なんか見るのか、諸君も大きくなったら研究してみるといい。小さい子どもの夢はわりと単純だ。パイナップルを食いたいと思ふとパイナップルの夢をみたりする。ところが、いざそれを食べようとする、急にパイナップルが大きくなって、おまけに口まであけて、逆に人間が食べられてしまったりする。ほんとうに夢というものは奇妙なものだ。

「夢ならどうせすぐさめるだろう」と、タローは思ったが、またこうも思った。

「すぐさめなくなつたっていいや。ここが熱帯地方なら、どこかにバナナぐらいありそうだぞ。せめて夢のなかでも、好きなだけバナナを食べてみたいなあ」

しかし、バナナなんて見つからなかった。一面の砂浜と、海と、岩ばかりである。近くには人家さえないらしい。

一匹のカニが足元にはいよつてきた。タローがつかまえようとして手をのばすと、カニはすばやく走って穴の中に逃げこんでしまった。カニは横に走るものである。それなのにこのカニは縦に走った。

「こいつめ」と、タローは思った。「ヘンチクリンなカニめ、どうしてもつかまえてやるぞ」

そして指先を穴の中にさしいれると、カニはハサミでイヤというほどタローの指先をはさんだ。「アツチツチ」

タローはあわてて指をひっこめて痛そうにしゃぶつてみたが、ふとこういうことに思いあたつ

た。

「おかしいなあ。夢なら、こんな痛い目にあったなら、たいてい目がさめるものだがなあ」
すると、頭の上で、ふといドラ声がひびきわたった。

「夢ではないぞ」

タローはビックリして顔をあげた。目の前に、がっしりした大男が立っている。赤銅色しゃくどういろに日やけして、まんまるい目をして、頭はハチにさされたようにデコボコしている。なんだか異様な大男だ。

「おじさんは、だれです？」と、タローはおそるおそるたずねた。

「船乗りヌボー」と、大男はドラ声でこたえた。「さあ行こう、クプクプ」

「え、なんですって？」

「もう船がでる時刻なんだ、クプクプ」

「クプクプって」と、タローは口ごもった。

「ぼくはタローですよ。クプクプなんて知りませんよ」

「おまえはクプクプじゃ」と、大男はわれがねのような大声でいった。「そうきまっているんだ」
「だって……」と、タローはおろおろと口ごもった。「ここはいったいどこですか、インドですか、アフリカですか？」

「インドってなんだね？」と、大男はききかえした。

「あれ、インドを知らないの。とにかく日本じゃないんだね」

「ニッポンでなんだね？」

タローは急に不安になってきた。それに大男の服装も、まるでずっと昔の船乗りみたいになかった。そうなのだ。

「いまはいつ？　ぼく、ずいぶん長く眠ったのかな。それとも、あんがいむかしにさかのぼって……。おじさん、今は紀元何年ですか？」

「紀元ってなんだね？」

タローはますます不安になってきた。

「おじさん、船乗りシンドバッドって人、知ってますか？」

「知らん、知らん」と、大男は首をふった。

「じゃあ、海賊ドレイクは？」

「だまれ！」と、大男はどなった。「時代なんかきいたって役にたたん。ここはメチャメチャの土地でメチャメチャの時代なんだ」

「やっぱり夢なんだなあ」と、タローはつぶやいた。「この大男、早く消えちまわないかなあ」

「夢じゃないったら！」

と、大男はとても大きな声でどなった。

「いいかね、おまえはけっして夢をみているんじゃない」

「そんなら、ここはどこなの？」

「ここは物語の世界だ」と、大男はいった。「ここはキタ・モリオとかいうやつが考えた物語の世界なんだ」

それから大男は、急に元気がなくなって、声をひくめた。

「じつはおれも弱っているんだ。キタ・モリオとかいうやつは、地理も歴史もちっとも知らない男らしい。だからこの世界はメチャメチャだ。おまけにおれの頭はこんなにデコボコにされるし、名まえだって、ヌボーなんておれはイヤだ」

そういつて、男はペソをかいた。乱暴のようできて、あんがい気の弱い男なのかもしれない。しかし、タローはそれどころではなかった。彼はほんとうに心配になってきた。

「じゃあ、ぼくはほんとうにクプクプなの？」

「そうだよ、坊や。正真正銘のクプクプだ。ほかのだれでもない」

「いったいどうしたら元の世界へかえられるかしら」

「それはおれもわからない。とにかく、キタ・モリオってやつは、物語をかきもしないでどこかへいっちゃったのだ。それだもので何事につけますます混乱している。きつとあいつもこの世界のどこかにいるにちがいない。もし出会ったら、ひとつおどかしてなんとかしてもらわなくちゃおれだって困る」

「これからどうしたらいいの？」